

英語学習はITとどう付き合っていけばいいのか

藤 森 千 博

【要 旨】

学生の英語学習においてスマートフォン（スマホ）はときに辞書代わりとして、ときに翻訳機代わりとして大きな役割を果たしている。しかしスマホを利用した英語学習に対しては賛否があるのも事実である。本稿ではまず学生が実際にどのようにスマホを英語学習に取り入れているかの実態調査を行い、学生の英語学習にとってスマホがなくてはならない存在であることを確認する。そのうえでその使用にどのような問題点があるのか、また実際にどのようにスマホを英語学習の中に取り入れていくべきかについて検討する。

【キーワード】

辞書を持たない学生 翻訳サイト利用の是非 スマホ活用度と英語習熟度の関係
スマホ任せにしない授業・課題

1. はじめに

コロナ禍の大学教育はオンライン授業というほとんどの教員が経験したことのない未知の領域での試行錯誤の連続であった。教職員以外誰もいないキャンパスで朝から晩まで資料作り課題作りに追われ、自らの授業動画をYouTubeにアップするという「にわかYouTuber」体験まですることになろうとは思ってもよらなかった。

筆者が主に担当している教養英語では、これまで使用してきた学内作成の共通テキストを活用して課題を作成してきたが、英文和訳（英文読解）にせよ和文英訳（英作文）にせよ、翻訳サイトを利用した回答を数多く見かけることとなった。もちろんコロナ前にもいかにも機械が作り出したと思われる「不自然な日本語」「不自然な英語」を見かけることはあったが、オンライン授業における課題への取り組みでその傾向は顕著になったように感じる。中にはご丁寧に「Translated by ○○」までコピーして提出する学生まで現れる始末で、いかにその中身を確認せず翻訳サイト任せで課題に取り組んでいるかがよく分かる。英語教育において「英文を読ませる」「和文を英語に翻訳する」という課題は必要不可欠な作業だと思われるが、翻訳サイトの正確さの向上や何よりその利便性から、多くの学生が翻訳サイトを利用し、その結果を「自分の課題」として提出することにためらいがないことがうかがえる。

また、コロナ前から気になっていたのは「学生が辞書をひかない」ということである。私自身

の経験から、未知の英単語に出くわした際はまず辞書をひいて確認するものだと思っていたが、学生に聞いてみると「辞書はほとんど使ったことがない」「そもそも辞書を持っていない」という回答が多数挙がった。では知らない英単語をどう確認しているのかを問うと、そのほとんどが「ネット検索」と回答する。ある調査によれば¹、今や中学生の60%以上、高校生・大学生の90%以上がスマートフォン（以下「スマホ」）を所有している。学生にとってスマホは生活必需品であり、彼らが必要とする多くの作業をスマホがこなしてくれていることは想像に難くない。知らない英単語と出くわしても、スマホをいじってネット検索すればそのトップ項目として英単語の「意味」が表示される。安い辞書でも数千円、電子辞書に至っては数万円という高価な道具をわざわざ準備せずとも、手近にあるスマホで目の前の課題をクリアできるので当然の結果と言えよう。

ではネット検索の何が問題か、であるが、これは紙製/電子辞書を使用する際にも言えることだが、トップ項目に表示された「意味」のみでその単語を「理解」し、その結果和訳が「不自然な日本語」になっていても気にしない、という点である²。英作文においても同様で、一般的にはあまり用いられないような「特殊な」英単語をひき当ててしまったとしても、それを確認することなく（「辞書をひいたら出てきたのだから間違いはないだろう」という思い込みで）平気で英作文で使用してしまう例は数えきれないほどある。

単語を正確に調べることもできず、英語課題の作業は翻訳サイト任せ。このような学生に対して「楽をするな」「他人の禪で相撲を取るな」などと叱責することは簡単だが、学生側からすれば「そういうことがフツーにできるようになったこの時代に、なぜそういうことをしてはいけないのか」という思いがあることも分かる。そういった機能を使う学生は今後の人生で英語と対峙するときもTPOにかかわらずいつでもそうやって乗り越えようとするだろう。だとすれば、スマホを辞書代わりに使うことや翻訳サイトを使うことを一律に禁止するのではなく、そういった「文明の利器」をどう活用して英語と向き合っていく（向き合わせる）べきかを考える段階に来ているのではないだろうか。

本稿ではこの問題に対する明確な解答にまでは至らないが、その道筋を見極めるうえで重要な学生の学習状況についてアンケートを行い、その結果から考えるべき方向性を探ることとする。

2. 「学生の英語学習に関するアンケート」

前節での問題意識を踏まえ、筆者が担当する英語関連授業において「学生の英語学習に関するアンケート」を実施した。

<アンケートの概要>

アンケート実施期間：2022年7月（各授業の第14回授業終了時）

アンケート実施方法：学内LMS「moodle」のアンケート機能を利用

アンケート対象：筆者が担当する「教養英語」3クラス、「英語学概論」1クラス、非常勤講師先（国立大学）「総合英語Ⅲ」2クラス、計131名（回答不備でデータから削除した学生8名は除く）

1 一般社団法人日本スマートフォンセキュリティ協会「中高生のスマホ利用傾向調査レポート2020年2月版」
https://www.jssec.org/dl/mss_report_202002.pdf

2 この点については成田（2019）でも同様の指摘がなされている。

アンケート項目³：

- (1) これまでに「英和辞書」の使い方について誰かに教わったことがありますか？
- (2) これまでに「和英辞書」の使い方について誰かに教わったことがありますか？
- (3) 紙製の辞書を持っていますか？
- (4) 電子辞書を持っていますか？
- (5) スマホの辞書アプリを使ったことがありますか？
- (6) ネット検索で単語を調べたことがありますか？
- (7) <スマホ辞書アプリ/ネット検索を使用したことがある人へ> いつ頃から使っていますか？
- (8) 分からない単語が出てきたときの対応として最もよく使うものは何ですか？
- (9) (8) について、なぜその方法を最もよく使いますか？簡単に理由を述べてください。
- (10) 日→英/英→日に訳す課題に対して翻訳サイトを使ったことがありますか？
- (11) <翻訳サイトを使ったことがある人へ> 翻訳サイトで変換された英文/日本語文を確認しますか？
- (12) (11) について、なぜそのような対応をしていますか？簡単に理由を述べてください。

3. アンケート結果と考察

3.1. 辞書の使い方をいつ教わったか

(1) 英和辞書の使い方	人数	%	(2) 英和辞書の使い方	人数	%
小学校のころ学校で教わった	13	9.9	小学校のころ学校で教わった	13	9.9
小学校のころ塾で教わった	7	5.3	小学校のころ塾で教わった	6	4.6
中学校のころ学校で教わった	58	44.3	中学校のころ学校で教わった	47	35.9
中学校のころ塾で教わった	9	6.9	中学校のころ塾で教わった	7	5.3
高校のころ学校で教わった	16	12.2	高校のころ学校で教わった	9	6.9
高校のころ塾で教わった	1	0.8	高校のころ塾で教わった	1	0.8
今まで教わったことがない	26	19.8	今まで教わったことがない	47	35.9
覚えていない	1	0.8	覚えていない	1	0.8

表1：これまでに「英和/和英辞書」の使い方について誰かに教わったことがありますか？

小学校では2011年から5・6年生を対象に英語の学習自体は始まっているので、現役の大学生はすでに小学校から授業の中で英語に触れる機会があったかもしれない。しかし、大津・鳥飼(2002)でも指摘されているように、特に導入初期の小学校英語教育は適切な英語教員不足、指導内容の不明確さ、適正な学習時間確保の困難さなど、学校で学ぶには不十分と言わざるを得ないようなものであったため、英語に触れはするもののその内部構成(単語や文法など)に触れることはほとんどなく、辞書のひき方という外国語に触れる際に必要不可欠と思われるノウハウを教わった学生は10%に満たなかった。

本格的な英語教育が始まる中学校に進むと、辞書のひき方についてレクチャーを受けたという

3 各アンケート項目の選択肢については後述する。

学生の割合が高くなる。これは当然の結果と言えよう。

この調査結果で浮き彫りになった問題点のひとつは、高校に進んでから辞書のひき方を教わったという学生が一定数いることである。そう回答した学生は、裏を返せば、中学校では辞書のひき方を教わっておらず、分からない単語が出てきたときに調べたくてもどう調べたらいいかを知らないまま、つまり単語の意味を確認できないまま中学校で英語を学んでいたことになる。そのうえ、該当学生がスマホの辞書アプリ/ネット検索を中学時代から利用していたかと言えばそういうわけでもないことがうかがえる。実際、英和辞書16人中3名、和英辞書9名中1名が中学校からアプリ/ネットを使用していたと回答している。このような学生に単語学習はどうしていたかを個別に聞いてみると「教科書に掲載されている意味だけを覚えた」「教科書巻末に掲載されている単語一覧表で確認した」と回答している。教科書にあがっている単語の意味は本文中での意味でしかなく、ひとつの単語が様々な意味や用法があることは確認できない。この状況を放置し高校まで先送りしてしまった中学校英語教育の問題点と言えよう。

さらに問題になるのは、これまで辞書のひき方を教わったことがないと回答した学生が英和辞書で20%近く、和英辞書では三分の一以上にのぼったことである。英語学習における辞書活用の重要性を考えると、これだけの学生がその使い方を誰にも指導されず英語と向かい合っていたというのは驚きを隠せない。特に教育課程が進めば進むほど、「どこかの段階で指導されているだろう」「まさか辞書の使い方を教わっていないはずがない」というバイアスががかかってしまうのではないだろうか。中学校、高校、そして大学においてでも、その都度辞書をどう活用したらいいかについて指導する必要があるように思われる。

3.2. そもそも辞書を持っているか

(3) 紙製の辞書	人数	%	(4) 電子辞書	人数	%
持っている	78	59.5	持っている	65	49.6
持っていない	53	40.5	持っていない	66	50.4

辞書の所有状況	人数	%
どちらも持っていない	29	22.1
紙製辞書だけ	37	28.2
電子辞書だけ	24	18.3
どちらも持っている	41	31.3

表2：あなたは紙製/電子辞書を持っていますか？

3.1.ともかかわる点であるが、そもそも辞書を（紙製であれ電子であれ）持っていないという学生が22%いるという点に注目したい。この学生のほとんどがのちの設問「分からない単語が出てきたときの対処法」にスマホのアプリ/ネット検索を選んでいることから、いわゆる「辞書」を所有していても単語を調べる手立ては備えていることが分かる。しかしアプリ/ネット検索の開始時期についての問いに対しては該当学生のほとんどが高校以降と回答している。ここでもやはり単語を調べる術を持たないまま中学校時代に英語と向かい合っていた学生が一定数存在することがうかがえる。

3.3. スマホ辞書アプリ/ネット検索の使用状況

(5) 辞書アプリ	人数	%	(6) ネット検索	人数	%
頻繁に使っている	50	38.2	頻繁に使っている	79	60.3
時々使っている	41	31.3	時々使っている	47	35.9
あまり使わない	21	16	あまり使わない	5	3.8
使ったことがない	19	14.5	使ったことがない	0	0

表3：スマホの辞書アプリ/ネット検索を使っていますか？

辞書アプリはスマホにプリインストールされていない限り自分でダウンロードする必要があるため、使用頻度がネット検索に比べて低いのは納得がいく。ネット検索については回答したすべての学生が少なくとも1度は利用したことがあり、今やスマホが英語学習において必要必需品であることは疑いようのない事実となっていることが分かる。

このような状況下において、3.2.の結果を併せて考えると⁴、英語教員としてどうしたものかと思案に暮れる事案が発生する。たいてい期末試験の際ネット接続が可能な通信機器の持ち込み・使用は禁止されている。大学入試センター試験や大学入学共通テスト、各大学での入学試験においてスマホを利用したカンニング事件が発覚・報道されており、スマホのようなネット接続可能な電子機器を入試のみならず期末試験においても使用禁止とするのは十分理解できる。しかし、上記のような「辞書＝スマホ」が一般的になっている状況においては、「スマホの持ち込み不可」は「辞書の持ち込み不可」と同義になってしまう学生が多数出てしまう。この問題への対応としては、①辞書持ち込みをそもそも不可にする、②持ち込み可能な辞書を購入させる（または知人から借りさせる）、③スマホを辞書代わりに使用することを特別に許可する、などが考えられるが、それぞれに難しい問題をはらんでおり、いまだに正解が見つからないまま毎期末にバタバタすることとなる。この件に関して実際に関係部署に相談した際は「スマホ使用は一切禁止」「辞書を持っていなければ買わせればいい」という②を提示されたため、学生には（1）初回授業時に期末試験ではスマホを使うことができないこと、（2）それに向けて辞書を用意してほしいこと、（3）せっかく用意したのであれば普段の学習で活用してほしいことを説明したが、手元に手軽に単語を調べられるスマホという「辞書」がある環境下でわざわざ辞書を購入する学生はほとんどなく、購入したところで使い方も分からず、結局期末試験のときだけ使い慣れない辞書を引っ張り出してきて悪戦苦闘することとなり、その結果該当授業の授業評価アンケートには「高いお金を出して使いもしない辞書を買わされた」「使ったことがない辞書に苦労して問題をろくに解けなかった」などのクレームが寄せられる始末である。

もし時代が変化し学生の学習環境が以前とは異なるものになっているのであれば（10年前であればスマホで単語をひくなど思いつきもしなかった）、それに合わせた形で変えるべきところを変える必要があるが、上記のようにスマホには常にカンニングの媒体となってしまう危険性があるため、一概に持ち込みを可とすることに抵抗があるのも確かである。学生の実情と試験実施の教務上の取り決めのあり方について検討する必要がある。

4 さらに3.5.の結果・考察を考慮する必要もある。

3.4. スマホ辞書アプリ/ネット検索の使用開始時期

(7) 使い始めた時期	人数	%
小学校	1	0.8
中学1年から	11	8.4
中学2年から	9	6.9
中学3年から	10	7.6
高校1年から	63	48.1
高校2年から	10	7.6
高校3年から	9	6.9
大学に入ってから	16	12.2
回答不一致	2	1.5

表4：いつから辞書アプリ/ネット検索を使っていますか？

高校1年生からスマホ辞書アプリ/ネット検索を利用し始める学生が多いことがうかがえる。ある統計によると⁵、スマホを初めて所有するのは中学校入学時で約70%、高校では100%に限りなく近い数字が示されていることから、スマホが辞書代わりになるなど英語学習に利用できることを認識するのが比較的遅いことが推察される。

3.5. 単語を調べる最も頻繁な手段

(8) 単語の調べ方	人数	%
紙製辞書	5	3.8
電子辞書	14	10.7
中高で使っていた単語帳や参考書	2	1.5
スマホの辞書アプリ	39	29.8
スマホのネット検索	70	53.4
何もしない	1	0.8

表5：分からない単語が出てきたときの対応として最もよく使うものは何ですか？

今や学生が最も頻繁に活用している「辞書」はスマホであることはこの結果からも明らかである。3.3.で論じたように、期末試験へのスマホ持ち込みの是非は多くの学生にとって辞書持ち込みの是非と同じ意味を持つ。「日々の学習の成果を測る」のが期末試験なのであれば、日々の学習環境に極力近い形で受験させることが望ましく、スマホで単語を調べるのが学生にとっての日常であるなら、期末試験へのスマホ持ち込みをどうすれば是とできるのかを検討する必要がある。

辞書アプリ/ネット検索と回答した学生にその理由を聞くと、日常的にスマホを肌身離さず持

5 モバイル社会研究所「モバイル社会白書2021年版」https://www.moba-ken.jp/whitepaper/wp21/pdf/wp21_all.pdf

ち歩いていることからの手軽さや操作のしやすさ、調べたいことを即座に調べられるなどの利便性を指摘する学生がほとんどである。

紙製/電子辞書と回答した学生は多くはないが、多くの学生が辞書としての信頼性に言及していることは興味深い。アプリ/ネット検索は紙製/電子辞書と遜色ない情報を提供してくれるように思われるが、熟語であったり例文であったりといった辞書が持つ重要（ではあるが丁寧に読み込まないと見つけられない）な情報に価値を見出している学生がいることは英語教員としてうれしい限りである。

また、今回のアンケートではそこまで詳しい設問設定にしなかったため真偽のほどは不明だが、「ネット検索」とひとくくりになっているが、ネットでどう単語を調べているかについてはっきりしない部分（さらに言えば適切ではない使い方）があるように思われる。1節でも触れたように、通常、yahoo!やgoogleなどの検索欄に英単語を入力すると、検索結果ページのトップにその意味が表示されるが、その単語の中で最もよく使われる意味が表示されるだけなので、その単語が持つ別の意味や具体的な例文まではその画面では確認することができない。Weblioや英辞郎のような辞書サイトにアクセスして単語を調べている学生がどのくらいいるのか、そのような学生と検索ページトップの意味だけでやり過ごしている学生との間に単語理解度に有意な差がみられるのか、今後さらに検討する必要がある。

また、アプリ/ネット検索と同様に「紙製/電子辞書の方が調べたいことをすぐに調べられるから」という意見が挙がっているのも興味深い。該当学生が辞書アプリ/ネット検索を使ったことがないわけではないにもかかわらず、中高で使い慣れたこれまで通りの方法が結局一番だという意見には、「英語学習は壮大な慣れ」というフレーズを思い出させられる。

裏を返せば、アプリ/ネット検索を日常的に利用していた学生にとって、分からない単語はスマホで調べるということが「壮大な慣れ」のひとつになっていることも事実であろう。授業中にスマホをいじる学生を好ましく思わない教員も少なくないだろうが、少なくとも英語学習においてスマホが必需品である以上、頭ごなしに使用を禁止するのではなく、適切かつ節度・良識ある利用を促しつつ、どのように活用すれば学生の学習意欲を高めることができるのか、その結果学生の英語力向上に寄与できるのか、などを真剣に検討すべきである。

3.6. 翻訳サイトの利用状況

(10) 翻訳サイト	人数	%
頻繁に使っている	40	30.5
時々使っている	64	48.9
あまり使わない	19	14.5
使ったことがない	8	6.1

表6 日→英/英→日に訳す課題に対して
翻訳サイトを使ったことがありますか？

成田（2007）によれば、日本国内における機械翻訳が著しいブームを迎えたのは1990年代、しかし当時の翻訳精度は散々なもので、機械が翻訳した文章を人の手で修正しなければならず、結局人が訳した方が速いというありさまだった。実際に2000年を過ぎ筆者が大学院生だったころ翻訳サイトを利用した覚えがあるが、とても意味が通じるとは思えない「血の通わない」日本語に翻訳され驚いたことを思い出す。しかしその後翻訳ソフトの品質向上、さらにAI技術の

進歩などにより、近年ではかなり自然な日本語に翻訳されるようになった。近年その翻訳結果が最も「自然」な言語に変換されると評判の翻訳サイトDeepL (<https://www.deepl.com/ja/translator>) を利用したことがある人も少なくないと思うが、確かに以前の翻訳サイトに比べると飛躍的に正確で十分意味が通る「自然」な翻訳になっていることが分かる。

また、機械翻訳の方法(手順)も進歩している。これまで一般的な機械翻訳の手順は、翻訳サイトの記入欄に翻訳したい日本語/英語を入力するとその翻訳が結果欄に表示される、というものだったが、例えばSNSアプリ「LINE」を活用し、翻訳したい文章をスマホで写真を撮るだけでスマホが自動的に文字認識しさらに翻訳までしてくれるという手軽な方法さえある。LINEを日常的に利用している学生にとって、身近なツールで期待以上の作業ができるのであればこれ以上便利なものはないだろう。

この手軽さゆえに、英語学習の中でも翻訳サイトを気軽に利用する学生は年々増加しているように思われる。今回のアンケート結果からもその傾向をはっきりと読み取ることができる。実際の段階から翻訳サイトを利用するようになったのかについては設問を用意しなかったので不明であるが、私見ではかなり以前から翻訳サイトを活用する学生はいただろうと思われる。例えばコロナ禍以前、教養英語の授業中にスマホで写真を撮影する際の撮影音が聞こえることがしばしばあった。当時上述のようなスマホアプリの機能で英語を一瞬のうちに日本語に翻訳できるということを想像すらできなかった筆者は、学生は何をしているのか、なぜ授業中というタイミングで写真を撮影しているのかが分からなかった。その点では学生の方が一枚も二枚も上手だったということになる。

ここで考えなければいけないのは、学生がこうした機械翻訳を利用することを英語教員側はどう捉えるべきか、である。これまでであれば、自力で英文を理解したり発したりすることができるようになるように訓練するのが英語の授業であり、そのように指導するのが英語教員の務めであり、したがって学生が与えられた課題に対して翻訳サイトを利用し「他力本願」でこなすことを許してはならぬ、というのが一般的なスタンスではなかっただろうか。しかし、これだけ学生の間に広く浸透した翻訳サイトの利用を自発的な学習を阻害する要因になるからと一律に禁止することは(その理由がいかにか妥当であったとしても)そもそも難しい。何より、先にも述べたが、教養英語の段階で翻訳サイトを利用している学生は、この先各自の専攻に進んだ後も、さらには社会に出てからも、英語と向き合うときは翻訳サイトを活用することになるだろう。そのような学生に授業の中でだけ翻訳サイトの利用を禁止しても意味がないし学生の役にも立たない。小田(2018、2019)が提案するように、翻訳サイトの授業での利活用を教員側も(全面的にはないにせよある程度)認めることで英語が苦手な学生が少しでも積極的に英語に向き合うことができるようになるだろうし、機械翻訳にはいまだに「限界」があることを実例を挙げながら検討・説明することで翻訳サイトに頼りすぎてもいけないということに気づくことができ、自分の力で英語と向き合う力を身につける必要性を実感することができる。頭ごなしに「翻訳サイトけしからん」とだけ唱える時代ではない。英語教育の新たな方向性や可能性がそこに秘められているのではないだろうか。

3.7. 翻訳サイト利用時の確認状況

(11) 確認するか	人数	%
その都度確認する	74	56.5
時々確認する	36	27.5

あまり確認しない	11	8.4
確認したことがない	1	0.8
翻訳サイトを使わない	8	6.1
回答不一致	1	0.8

表7：翻訳サイトで変換された英文/日本語文を確認しますか？

学生が翻訳サイトを利用することを（様々な条件付きではあるが）是とした場合、最も重要なポイントは「翻訳サイト任せにしない」という点ではないだろうか。上述のようにいまだ翻訳サイトの精度は完璧とはいえない現状を考慮すると、翻訳サイトで得られた結果はあくまで「たたき台」とすべきであり、その翻訳結果が意味が通じる「自然」な表現になっているか、少なくともおかしいところはないかをその都度確認する必要がある。今回のアンケート結果からは半数以上の学生が「その都度確認する」と回答しており、「時々確認する」を含めると80%以上の学生が確認の必要性を意識していることが分かる。

この結果だけ見るとその点に関しては問題なさそうに思われるが、設問12「翻訳結果を確認する理由」を検討するとひとつの疑問点が浮かんでくる。多くの学生（68名（60%））が確認する理由として「正しく翻訳されているか」に少なからず疑念を持っていることを挙げているが、ここでいう「確認」がほとんどの場合英文を日本語に翻訳した際の「自然」さの「確認」ではないかと思われる。学生自身が日本語母語話者であれば、翻訳サイトがはじき出した翻訳結果が意味の通じる「自然な」日本語になっているかを検討することは自身の母語に対する言語直感を活かすことができるので容易に可能である。一方、日本語を英語に翻訳した際の結果の確認について明確に言及しているものは5名（3.8%）のみで、中には「日本語訳については確認するが英語訳については確認しない」と明言している学生もいる。今回の設問設定では学生が言う「確認」が具体的に何を指しているかは定かではないが、多くの場合上述の学生のように明言こそしてはいないものの、日本語訳に対しての「確認」のみを取り上げている可能性が高いのではないだろうか。

もしそうだとすれば、そして学生が英→日だけでなく日→英でも翻訳サイトを活用しているとすれば、英→日で生じている「不自然」な翻訳が日→英でも生じているのではないかと想像するべきで、つまり機械翻訳には「限界」があること、詳細な部分については日本語であれ英文であれ自分で確認しなければいけないということに気づく必要がある。しかし、そもそも翻訳サイトを利用するのは英語が苦手だから、あるいは楽をしたいからであり、自分の言語直感で確認できる英→日翻訳ならまだしも、結局辞書を持ち出したり高校時代の文法テキストをひっくり返したりしなければいちいち確認できない日→英翻訳を確認するのは無駄な努力ととらえられてしまうようである。何より、英語が苦手な学生にとっては「自分で考えて英文を書くよりはミスが少ないと思うから」「翻訳サイトを信頼してるから」ということになるし、翻訳サイトで翻訳するという作業自体を「学習」ととらえているとすれば「一度調べたことをまた調べるのは無駄だと思うから」という発想にもなる。

翻訳サイトが特に英語が苦手な学生にとって強力なサポートになることは間違いのない。しかし、その精度にまだまだ不確かさが残る翻訳サイトの翻訳を妄信的に頼ってしまうのは心許ないし、何より「英語学習＝翻訳サイトで翻訳すること」と受け止められるようなことがあってはならない。翻訳サイトの存在を否定せず、その利点も認めつつ、どのように活用するのが英語教育として望ましいかについてもっと真剣に検討する必要がある。

3.8. 英語の習熟度で違いはあるか

2節でも説明した通り、今回のアンケートは筆者が担当する英語関連授業の受講学生に対して実施したものをひとくくりにしてまとめたものだが、回答した学生の英語の習熟度はクラスによって様々である。というのも、教養英語ではプレースメントテストやTOEICなどの標準化されたテストの結果を基に習熟度別のクラス編成しているからである。もし今回のアンケート結果に習熟度が高いクラスの学生と低いクラスの学生との間で何らかの有意な違いを見出すことができれば、英語ができる/できないの要因を明らかにすることができるかもしれないし、教員側として何をどのように指導すべきかのポイントをみつけることができるのではないだろうか。

今回アンケートを実施したクラスの習熟度は、TOEIC換算で400～500点の中上位層（1クラス）、300～400点の中位層（2クラス）、200～300点の下位層（3クラス）に分けることができる⁶。この分類を基にこれまでに挙げた設問項目について触れていく⁷。

辞書の使い方については、ほとんどのクラスにおいて英和辞書は約3割、和英辞書は4割程度の学生が教わっていないと回答しているが、唯一中上位層クラス全員は英和辞書については中高のいずれかの段階で使い方を教わっていると回答している⁸。辞書のひき方を適切に指導され身につけた学生は英語力が高くなる、という本稿にとって期待すべき望ましい仮定が成り立つのではないだろうか。

辞書の所有状況についてはさらに興味深い点が挙げられる。紙製の辞書の所有率は上位層は高く（6割程度）下位層は低い（2割程度）こと、また、紙製/電子どちらの辞書も所有していない学生の割合は下位層ほど高いこと（上位層1割程度に対し下位層4割程度）が指摘できよう。3.5.で示したように、学生の多くが分からない単語をスマホの辞書アプリやネット検索で調べることはひとつの大きな傾向であるが、その作業自体が持つ「意味合い」が英語習熟度によって異なっていると考えすることはできないだろうか。つまり、上位層の学生は作業の手間を省くためにスマホで単語を調べるが、それだけでは不十分な点を辞書で確認することができる。一方、下位層の学生は、手間を省くためという点は上位層と同じだろうが、その検索結果のみで事足りる、もしくは事足らせようとしている。もしそうだとすれば、英語に取り組む姿勢、分からないことに対する対処の仕方に大きな違いがあることになる。英語は我々非母語話者にとって一生かかっても外国語である以上、辞書との付き合い方を知っているかどうかは外国語学習にとって重要な点であると言えよう。

翻訳サイトの利用については、多くの学生が少なからず利用していることは3.6.で述べた通りだが、そんな中でも上位層では「あまり使わない」「使ったことがない」と回答する学生が散見される（合計で2割に満たない程度）のに対して、下位層ではそのような回答は全く見られないこと、さらに翻訳結果の確認についても下位層ほど「あまり確認しない」「確認したことがない」と回答する学生の割合が増えている（上位層では数名のみであるのに対し下位層では1割程度）ことが指摘できる。3.6.および3.7.で指摘したように、筆者は翻訳サイトの活用自体を否定するものではないが、それに頼りきりになってしまうのは（成田（2019）の言葉を借りれば）「思考

6 実際のクラス分けではさらに最上位層クラスもあれば最下位層クラスもあり、より詳細に分析するためには全クラスに同様のアンケートを実施する必要がある。

7 TOEICスコア換算からも分かるように、今回アンケートを実施したクラスの習熟度ではそこまで有意な差を期待できるほどの区別とはなっておらず、脚注6でも触れたようにさらに幅広いデータを収集・分析する必要があることは言うまでもない。今回の比較分析は今後のさらなる分析の方向性を探るひとつの足掛かりととらえている。

8 和英辞書についてはほかのクラスと同様4割程度が教わっていないと回答している。

の放棄」と言えよう。英語が苦手→翻訳サイトを使う→その結果を確認できない→そのまま提出→英語は苦手のまま、という悪循環が下位層の学生の中で見事に回っていることが想定される。翻訳サイトの利用を認めるのであれば、その次のステップ「その結果を確認できない」を「確認できる」に変えられるよう、翻訳サイトではどのようなミスが起きているのか、それを踏まえてどんなことができるようになる必要があるのか、などを指導する必要がある。その点では小田(2018、2019)の主張・提案をいかに実践してくかということにつながるだろう。

4. アンケート結果を踏まえて

まず、3節を簡単にまとめると以下ようになる。

- (1) 英和辞書にせよ和英辞書にせよ、その使い方について十分に教えられていない学生が一定数存在する。
- (2) 今や「辞書＝スマホ」の時代である。
- (3) 翻訳サイトの利用度は高いが、その精度に対する信頼度は二分している。
- (4) 英語ができる学生と苦手な学生の間には英語学習におけるスマホ利用に対する姿勢・態度に根本的な違いがある可能性がある。

今回のような詳細なアンケートはこれまでに実施したことはないが、毎年筆者が担当する教養英語の初回授業において今回実施したアンケートと同様の項目について挙手による状況把握というインフォーマルな確認は行ってきた。その結果は今回のアンケート結果とほとんど変わらないものであり、授業内容やその組み立て、どのような課題を与えるのが効果的かなどについてそれなりに検討し実践してきた。これまでの学生の様子や今回のアンケート結果を踏まえて、この調査以前から実際に筆者の授業で実践している取り組みを踏まえながら検討したい。

4.1. 辞書の引き方を知らない英語学習者に対して

英和/和英辞書をひくということは、英語学習における必要不可欠な作業である。実際、『中学校学習指導要領解説 外国語編』には「辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること」と記載されている(福田(2016))。辞書のひき方を知らないまま英語に立ち向かうのは、バットの振り方も知らないまま打席に立ってヒットを狙うようなものだ。3.1.で述べたように、本来辞書のひき方については本格的に英語に触れ始める中学校最初期に丁寧に指導する必要がある。この段階で適切な指導を受けず辞書をひくという作業を「面倒くさい」ととらえてしまうと、3.7.で考察したように、その後の学修成果にも大きく影響する可能性があるからである。

しかし実際には「辞書」の所有率はそれほど高くなく、ほとんどの学生がスマホでの単語を調べていることも明らかである。そこで、筆者が担当する教養英語の授業では「ネットで単語を調べよう」という回を設けている。ここでは、検索ページのトップに表示される意味のみで確認したつもりになっていないか、その表示内容がいかに不十分であるかを指摘・説明した後で、Weblio、英辞郎、goo辞書の3つネット辞書について紹介し、それらの活用方法について簡単にレクチャーする。その際学生には「単語の意味を調べるだけではその単語を理解できない」ということを何度となく説明する。具体的には、辞書をひかなければ意味さえ知らない単語を文の中でどのように使うのか(使われているのか)を知っているはずはなく、例文を確認することでし

かその単語が実際にどう使われているかを確認することはできないこと、したがって単語を調べたら必ず例文に目を通し実際どのようにその単語が使われているかを確認することを伝えている。反応は全体的には薄いものの、中には「そんなことは今まで誰にも言われたことがなかった」「目からうろこ」と共感しその後の学修の中で実践する学生もいる。懇切丁寧な説明ではないが、ちょっとしたヒントを与えることで学生側が気づき変わってくれるきっかけを与え続ける必要があると感じている。

4.2. 翻訳サイト任せにしないためには

これまでの英語教育において翻訳サイトは「パンドラの箱」だった。教員は授業課題にそれを活用することを否定し、学生はそれを利用したことを公にはできなかつた。厳密に追及する教員であれば、学生の翻訳がそういった便利な道具の受け売りになっていないかを逐一チェックするだろうが、ずぼらな筆者は「見て見ぬふり」をしてきた。結局お互いに何とも後ろめたい思いをしながらやり過ごしてきたのである。

しかし、これまで随所で述べてきたように、「翻訳サイトの活用を否定せず」「かといって翻訳サイトに任せきりにしない（させない）」とこの問題を抜本的にとらえ直すことによって、現代の学生が身につけるべき英語との付き合い方の輪郭が明確になる。筆者が担当する授業では初回で翻訳サイトについて紹介し、最初に手の内を明かしてしまうことにした。翻訳を準備するだけならこんなに簡単にできるよ、と。では、その授業で何を課題とするかだが、ひとつの文を「丸ごと」訳すのは翻訳サイトでできる作業だが、ある一定の規則で英文を「細切れ」に分解し、それぞれの中身を確認させるたうえで再度組み立てることで、なぜその文がそのように訳されるのかを考えさせている。いわゆる「スラッシュリーディング」と呼ばれる学習法である。スラッシュリーディングの詳細についてここでは触れないが、翻訳サイトの翻訳結果を「そのまま」にしない、自分で英文をばらし組み立てる力を養うには最適の方法と考え実践している。

また、翻訳サイトとスラッシュリーディングで英文の内容を確認した後、その内容を日本語で要約させるという課題も取り入れている。大学入学共通テストやTOEICの試験問題を見れば明らかだが、いま求められている英語力は精読ではなく速読・多読であり、大まかな内容をいかに早くとらえるか、である。また、ロジカルシンキングの重要性が指摘される中、書かれていることを垂れ流すようにそのまま伝えるのではなく、自分の中で咀嚼し自分のことばで伝える力が求められている。そのような観点から、全文訳は翻訳サイトで確認できるが、そこからそのストーリーをどのようにまとめるか、何を主題としてとらえるか、それをどう構成し伝えるかで全体的な内容の理解度を測ることができる。以前であれば全文訳の確認をしておしまだったが、翻訳サイトありきとしたときに展開可能な課題のひとつとして要約をとらえ、授業内で課題としている。

5. おわりに

技術の進歩は我々の生活を豊かにしてくれる。スマホ機能の充実や翻訳サイトの精緻化それ自体は海外旅行で困ったときや英語で話しかけられたときの救いの手として歓迎すべきことだろうが、ひとたびそれらを学生が授業で用いるとなると強い拒否反応が出ることも確かである。それを良しとしないことも十分理解できるし、そもそもほんの数年前までは筆者も授業でのスマホや翻訳サイトの使用は認めていなかったが、今回のアンケート結果を見ると、少なくとも頭ごなし

に否定するだけでは学生との間に軋轢が生まれるだけで双方にとって有益ではないこと、したがって教員側はスマホや翻訳サイトの利用をある程度許容すること、一方学生側は不確かな細部を確認できるだけの英語力を身につけることをお互いの譲歩点として認識することで、少なくとも形式的な授業にだけはならず済むのではないだろうか。お互いにとって「実のある授業」のあり方を今後も追求したい。

参考文献

- 福田稔. 2016. 「中学校英語における辞書指導について」 宮崎公立大学人文学部紀要24 (1), p. 185-196.
- 成田一. 2007. 「機械翻訳の歴史と今後の展望」 Japio 2007 year book. p. 214-221.
- 成田一. 2019. 「自動翻訳の高度化と英語教育」 Japio 2019 year book. p. 264-273.
- 小田登志子. 2018. 「翻訳アプリについて語学教員は何を言うべきか」 平成30年度教育改革ICT戦略大会. p. 304-305.
- 小田登志子. 2019. 「機械翻訳と共存する外国語学習活動とは」 東京経済大学人文自然科学論集145、3-27.
- 大津由紀雄、鳥飼玖美子. 2002. 小学校でなぜ英語？－学校英語教育を考える 岩波ブックレット

